

います。²⁵

また、「女性」「男性」という言葉を使う時には、「いわゆる」という意味で使います。私は、人間の性は「男と女」だけではなく多様であると理解しています。しかし人間一般という形で語ると、代表として「男性」が思い浮かべられることが多く、父権制社会で「他者」とされてきた色々な人々が見えない存在にされる傾向があります。そこで、いわゆる生物学的な「女性」に限らず、父権制社会・文化の中で見えにくい存在にされてきた様々な「他者」を象徴する意味で、時々「女性」という言葉を使います。²⁶



ガリラヤの丘（著者撮影）

25 聖書テキストを私訳にするのは、原語のニュアンスを出す工夫や原語に無いニュアンスを除く工夫のゆえである場合があります。特に、現在の日本語訳聖書では神が男性として感じられる言葉遣いに訳されているという問題があります。一つの性のイメージに限定されない日本語表現を使うように心がけたいと思います。山口里子『新しい聖書の学び』34。

26 山口里子『新しい聖書の学び』30, 34。

第1章 ぶどう園の小作人たち

(マルコ 12:1b-9a)¹

I. テキスト

⁽¹⁾そして彼等に、譬え話で（イエスは）話し始めた。（1人の）人がぶどう園を植えた（作った）。垣を巡らし、酒舟を掘り、見張り塔を建てた。そしてそれを農民たちに貸して旅に出た。⁽²⁾（ふさわしい）時期が来たので、農民たちに向けて奴隷を送り出した。ぶどう園の収穫を受け取るために。⁽³⁾だが（彼等は）彼を捕まえて殴り、空っぽで（手ぶらで）送り出した。⁽⁴⁾そこでまた彼等に向けて他の奴隷を（彼は）送り出した。すると彼を（彼等は）殴って頭を傷つけた。そして辱めた。⁽⁵⁾更にもう一人を送ったが、その人を（彼等は）殺した。多くの他のを送ったが、（彼等は）ある者を殴り、ある者を殺した。⁽⁶⁾まだ一人、愛する息子を持っていた。「私の息子なら敬うだろう」と言って、彼を最後に送った。⁽⁷⁾けれども農民たちは互いに対して言った（話し合った）。「これは相続人だ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる」。⁽⁸⁾そして彼を（彼等は）捕まえて殺し、ぶどう園の外に彼を放り出した。⁽⁹⁾さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか？ 戻って来て農民たちを殺し、ぶどう園を他の人々に与えるに違いない。……

II. これまでの解釈

福音書に書かれているイエスの譬え話（パラボレー）は、伝統的に寓喩的（アレゴリカル）に解釈されて、「主人＝神」として読まれて来ました。²

1 この章は以下を土台に編集しました：恵泉女学園大学 2012 年度公開講座「イエスのたとえ話」。日本フェミニスト神学・宣教センター 2013 年 7 月定例セミナー「ぶどう園の小作人たちの譬え話」（『日本フェミニスト神学・宣教センター通信』82 号、2013）1-11。

2 「寓喩」は「アレゴリー」（allēgoria ← allos 他 + agoreuein 話すこと）の訳語です。これは、ある事物を直接的に表現するのではなく他の事物によって暗示的に表現する方法です。そこで「寓喩的解釈」とは、例えば話の中の「主人」は「神」を

この譬え話の寓喩的解釈でも一貫して「主人＝神」です。その他の要素については、時代の流れや学者間で多少の違いがあるものの、おおむね、ぶどう園＝イスラエル、農民（小作人たち）＝イスラエル（宗教）指導者たち（あるいはユダヤ教徒たち）、奴隷（僕）たち＝預言者たち、息子＝キリスト、「他の人々」＝イスラエルに代わる異邦人（あるいはクリスチャンたち）です。

そしてここから、主なる神の決定的かつ最終的なメッセージであるイエス・キリストを感謝して受け入れず拒絶する、不法・傲慢な「農民たち」のような人間は、神の裁きによって退けられ、他の人々に置き換えられる、というような解釈がされて来ました。このような、「主人＝神」として、「農民たち」の不服従を非難・断罪する解釈は、伝統的な寓喩的解釈

暗に示しているというように、話の中の要素が何かを暗に表現しているとして解釈するものです。

紀元1世紀、アレクサンドリアのフィロン（紀元前20/30頃 - 紀元40/45頃）は、イスラエルの信仰をギリシャ哲学と調和させるように試みるなかで、「イエスの譬え話」を寓喩的に解釈しました。2世紀になると寓喩的解釈は盛んになり、その後近代にいたるまで一貫して寓喩的解釈が行なわれて来ました。A. M. ハンター『イエスの譬・その解釈』30-40。

19世紀以後、聖書学の世界では寓喩的解釈に対して批判的になりましたが、その後もこの傾向は強く残っています。そして基本的に「イエスの譬え話」の「主人＝神」とする解釈は健在です。

ただ、英語圏ではヘルツォグの著書（William Herzog, *Parables as Subversive Speech*, 1994）以後、「イエスの譬え話」の解釈に大きな変化が起きてきました。福音書に書かれる前の、イエスがガリラヤ農民に語った元々の譬え話のレベルでは、自動的に「主人＝神」とする解釈に対して大きな疑問が投げかけられるようになったのです。

しかし日本のものは、福音書著者の編集枠の中で解釈するのではなくイエスが語った元々の形に遡って解釈すると明白に述べる2000年以後の出版物でも、基本的に従来通り「主人＝神」という理解は変わっていません。これは大変残念なことだと思います。例として：荒井献『イエス・キリスト 下：その言葉と業』（2001）。田川建三『イエスという男』（1980/2004）。加藤隆『「新約聖書」の「たとえ」を解く』（2006）。上村静『宗教の倒錯』（2008）。なお、日本で「主人＝神」としない例外的な解釈を割と早くに短く紹介したものとして：山口雅弘『イエス誕生の夜明け』（2002）181-186。

を否定するようになってからも、主流です。³

確かに、ヘブル語聖書の時代から、ぶどう園はイスラエル、所有者は神で、ぶどう園の管理をイスラエルの指導者たちに委ねるという比喩の仕方が伝統的にありました。そしてぶどう園の「主人＝神」から送られた「息子＝キリスト」とする解釈は、福音書著者たちが編集した形で、福音書の文脈の中で読む限り、適切だと言えるかも知れません。つまり、紀元1世紀後期70～90年頃に、福音書著者たちがそれぞれの神学理解や教会の状況に合わせて編集して記述した譬え話を読む限り、このような解釈は妥当だと言えるかも知れません。

しかし紀元30年頃にイエスがガリラヤで農民たちに語った時はどうだったのでしょうか？ 本当に「主人＝神」で、「農民たち」は神の裁きの対象とされていたのでしょうか？⁴ イスラエルには多様な信仰伝統があり、イエスは伝統を尊重しつつ、選択的・創造的に継承する姿勢を持っています。⁵

農民たちは、イエスの譬え話からどのようなメッセージを聞いたのでしょうか？ そこでどのような経験をしたのでしょうか？ それを探ってみましょう。

3 例：C. H. ドッド『神の国の譬』（原著1935/訳1964）。H. ティーリケ『畑の中の宝』（原著1957/訳1970）。ハンター『イエスの譬・その解釈』（原著1960/訳1962）。エレミアス『イエスの譬え』（原著1966/訳1969）。そこで小作人たちは、「地主への当然の支払いを拒否する反乱者」（ドッド、163-172）、「神から貸与されたに過ぎないものを自分自身のために要求する者」（ティリーケ、12）で、「人間の感謝のなさに恐怖を感じさせる」話（O'Neil, "The Shocking Prospect of Killing the Messiah," 1997, 172-174）というように、一貫して農民が悪者として非難されてきました。

4 そもそも、「息子は神からの決定的・最終的なメッセージであるキリスト」という理解は、イエスより後の時代の神学を反映したものであって、それをイエス自身に遡らせる理解は、時代錯誤の誤読です。参照：Barbara Reid, *Parables for Preachers: Year B*, 112-120。

5 参照：山口里子『新しい聖書の学び』94-98, 124-134、『虹は私たちの間に』295-304、『いのちの糧の分かち合い』24-36, 55-56。

Ⅲ. オリジナル版に近い形で「聞く」ための考察

この譬え話は「トマスによる福音書」を含む4つの福音書に記されています(マルコ12:1-12、マタイ21:33-42、ルカ20:9-19、トマス65)。そして、恐らくイエス自身に遡る話だと考えられています。つまり後の時代の人々が作った話や一般に知られていた話を福音書著者たちが流用した話ではなく、ナザレのイエス自身がガリラヤで語った譬え話だと考えられています。⁶

ただし、諸福音書著者が記述・編集する前の、歴史のイエスが語った譬え話の元来の形、オリジナル版を確定するのは、⁷ 易しいことではありません。常に間違っている可能性を踏まえての試みです。その認識の上でのことですが、諸福音書著者の神学・編集傾向の分析などから、イエス自身が語った譬え話は恐らくこのようなものであっただろうという推測は、出来るようになっていきます。

この譬え話については、「マルコ12:1b-9a」がオリジナル版すなわちイエス自身が語った譬え話に近い形だろうと、多くの聖書学者が推定しています。⁷

6 「トマスによる福音書」というのはイエスの語録集で、114の語録が収められています。その内79の語録が共観福音書(マルコ・マタイ・ルカ)との並行箇所を持ち、トマス版の方が古いイエス伝承を保持している場合も多くあります。現存テキストは「グノーシス化」された2世紀のものと言われますが、そのように編集される前の「トマスによる福音書」は共観福音書より早い50年頃には成立していた可能性があります。参照：フィメ・パーキンズ「トマス福音書」。

「ナザレのイエス」という表現について。当時の人々は「姓」を持たず、出身地に基づいて「ナザレのイエス」、「マグダラのマリヤ」というような呼び方をしていました。現代の聖書学で「ナザレのイエス」と言う時、それは「ナザレ出身の」という意味とともに、そこで生まれ育った1人のユダヤ人という、歴史的実在の人物としての「イエス」に注意を向ける意味があります。

7 トマス版のほうがオリジナル版に近いという見方もありますが、それが明白と思われる箇所は以下の説明で述べます。また、8節で終わるという見方もありますが、最近では9aの問いで終わるという見方でかなりの合意があります：Herzog, *Parables*

Ⅳ. テキスト分析

1. 状況設定と時代背景

譬え話の始めに述べられる主語は「人」(anthrōpos)。これは、神・動物と区別して人間一般をさす言葉です。ですから、言葉の「標準形=男性形」で述べられていますが、性別が限定されません。男でも女でもあり得る「人」です。⁸

ある人が、ぶどう園を作ります(12:1)。「垣を巡らし、酒舟を掘り、見張り塔を建て」ます。と言っても、「ある人」本人がそのような労働をしたのではなく、男女の奴隷たちが労働をして、「主人」のぶどう園を作ったということです。⁹

as Subversive Speech, 98-113. Reid, *Parables for Preachers: Year B*. Louise Schottroff, "The Parables of Jesus" など。私は9a説を取りますが、もしも8節で終りであったとしても(つまり最後の問いは聴衆の心の中に引き起こされるものであったと仮定しても)、以下に紹介する解釈は当てはまります。

8 聖書が書かれた言語であるヘブル語もギリシャ語も含めて、古代男性中心言語では、「標準形=男性形」で、性別を特定しない(できない)場合には「標準形=男性形」を使うという文法がありました。女性に限定した事柄を述べる時だけ「派生形=女性形」を使ったのです。ですから、「男性形で書かれているから男性だ」とは言えません。男女両方(の要素・可能性)が含まれている場合も「標準形=男性形」だからです。参照：山口里子『虹は私たちの間に』19-20、『新しい聖書の学び』49-50、『いのちの糧の分かち合い』165, 182。

9 ここの「酒舟」(hypolēnos ← hypo 下 + lēnos ぶどう搾り場)は、ぶどうを入れて足で踏むように岩に掘ったぶどう搾り場からぶどう果汁が流れ落ちるのを受けとめるように、搾り場のすぐ下に続いて岩に掘った果汁受け穴のことです。

「見張り塔を建てる」の「建てる」には(oikodomeō ← oikos 家 + demō 建てる)という言葉が使われています。ちなみに、この言葉の人を指す名詞形「oikodomountes」は「建物を建てる石工職人」を指します。これに対してイエスの父ヨセフとイエスには「tectōn」(主に家具を造る木工職人)という言葉が使われており(マタイ13:55、マルコ6:3)、一般的に家を建てる時に使われる「大工」とは異なります。参照：「はじめに」注19。

「ある人が〜を作った」とは、実際には「男女の奴隷たちが労働して(させられて)、ある人(主人)の〜を作った」ということです。このことは当時の聴衆には馴染み

イザヤ書には、ぶどう園を作る時の様子が書かれたテキストがあります。「良く耕^{たがや}して石を除^{のそ}き、良いぶどうを植えた。その真ん中に見張り搭を立て、酒舟を掘り、良いぶどうが実るのを待った」(5:2)と。ぶどう園を作る作業は昔から基本的に変わっていないことを示していると考えられます。¹⁰

ただし、イザヤ書には「良く耕して石を除き」という言葉が始めにあり、耕地^{こうち}でない所を開墾^{かいこん}してぶどう園を作ることを示しています。その一方、イエスの譬え話では、後から説明しますが、恐らく既に耕地^{すで}だった所をぶどう園にするのですから、その開墾作業がありません。代わりに「垣を巡らし」という作業が最初に述べられています。周囲の貧しい農民たちの敵意や盗難に対する「垣」がまず必要だったということを暗示しているようです。

さて、紀元1世紀のガリラヤ農民たちにとって、このことはどのようなイメージを持ったでしょうか？¹¹

当時ユダヤ人たちは、強大なローマ帝国支配下で生活していましたが、ローマ帝国支配と、その下で奉仕するユダヤの「王」ヘロデ政権とエル

サレム神殿体制による支配で、庶民は3重の税金を負わされていました。すなわちローマ帝国の税金、ヘロデ政権の税金、エルサレム神殿の神殿税という3重の税金です。これらによって、多くの農民は実質的に収入の約1/2～2/3が取られてしまう状況でした。¹²

更に、当時度々起きた飢饉・水不足にも苦しめられて、農民たちは暴力的・絶望的な経済状況に置かれていました。このため、多くがガリラヤから始まって他へも広がる形で、幾つもの農民一揆や抵抗運動が起きましたが、軍隊の力で鎮圧されました。多くのユダヤ人たちは、このような状態で借金を返せずに先祖伝来の土地を奪われました。そして、自営農民から賃借小作人(他人の土地を賃借して働く農民)、そして物納小作人(賃借料を収穫物で納める農民)、更に日雇い労働者や負債奴隷、そして「乞食」へと落とされていく、暴力のスパイラルがありました。農民にとって土地は無く

ジェームス・ダグラスの指摘によると、植民地支配は、昔から現代に至るまでも、具体的にはその土地・民族の支配階級を(下請け)「代行者」として活用する形で行なわれます。ローマ帝国は、ユダヤの「王」たちや祭司的貴族階級を巧みに活用しました。紀元6-41年に、エルサレム神殿の祭司長たちは、(政治・経済のような社会の事柄に関心を向けず)「聖書に専念」することによってローマによって選任され、地位を保持できました。このような(下請け)「代行者」権力層の在り方は、現代においても生活困難や飢饉でゲリラの抵抗運動が起きる被植民地支配下の社会に一致しています。

さて、ローマ税は15-20%でした。エルサレム神殿は農民の年間収穫の20%以上を税として実質的に取っていました。合わせると農民の全収穫の35-40%が税として奪われました。その上に、ユダヤ王制の税、関税・通行税などがあります。また、小作人たちは新しい土地所有者に25%を払わなければなりません。飢饉・不作があれば負債はかさみ、生活できなくなって土地を失い、負債奴隷になっていきました。抵抗運動や暴動が、貴族たちが管理していた負債証書を焼こうとしたのはそのためです。強盗・盗賊が増えるなかで、ローマ帝国の権威当局は、社会的盗賊たちだけでなく、不法者をかくまっている嫌疑で村人たちをも懲らしめる行動を取りました。これらは、現代の「第3世界」の農民が直面している状態に共通項の多い事柄です。James Douglass, *The Nonviolent Coming of God*, 90-92.

農民の収入の1/2～2/3が実質的に税金に取られることに関して更に参照: Douglas Oakman, *Economic Question*, 57-72. C. H. Dodd, *The Parables of the Kingdom*, 94. Reid, *Parables for Preachers: Year B*, 114.

¹⁰ Schottroff, *The Parables of Jesus*, 16.

¹¹ 山口雅弘『よくわかる新約聖書の世界と歴史』53-86. Schottroff, *The Parables of Jesus*, 15-24. Herzog, *Parables as Subversive Speech*, 102-103.

てはならないもので、なんとしても守ろうとしたのですが、¹³ 窮^{きやうじよう}状につけこむ「サラ金」のような高利子の借金の^{ていとう}抵当として、土地が次々に奪われていったのです。

2. ぶどう園作り

以上のような社会状況のなかで、ごく一握りのユダヤ人たちは、ローマ人の貴族層と同様に、貧農たちから借金の^{がっぺい}抵当として土地を奪い、小作人や負債奴隷の労働を搾取することで、非常に裕福になりました。こうして、ユダヤ人たちの間でも、非常に富裕層と非常に貧困層という二つの明白な階層分化が進みました。

大土地所有者は、農民たちから奪った土地を合併して広大な土地を確保すると、ぶどう園を作りました。自営農民が生存のために作っていた穀物^{こくもつ}生産よりも、ぜいたく品・輸出品になるワインを作るようにぶどう園を経営するほうが収益が多かったからです。

ぶどう園を新しく作ることが出来たのは非常に富裕なエリートでした。1世紀のガリラヤの土地はすでに余地なく耕作されており、ぶどう園を新しく作るということは、誰かの土地を取り上げて自分のものにするということの意味しました。そしてぶどう園そのものを作るためにかなりの投資が必要な上に、小作人たちに世話を続けさせても最初の4年間はぶどうの収穫を得られませんでしたから、十分な資産を持っていなければ出来ないことだったのです。¹⁴

ぶどう園の主人は、農民たちを雇い、契約に基づいて賃借料を支払わせるか、たいがい収穫の一部を納めさせるようにしました。

しかし圧倒的多数の農民が生存ギリギリの生活をしている村の真只中の^{まっただなか}

13 当時、正当な利子とみなされたのは12%が上限でしたが、現実には60-200%もの高利子がつけられていました。Herzog, *Parables as Subversive Speech*, 161.

14 最初の内、小作人たちはぶどうの木の間に野菜を植え育てました。畑で異なる品種を混ぜて植えてはならないという戒め(申22:9)は、初めの収穫までの4年間は適用されませんでした。Herzog, *Parables as Subversive Speech*, 102-103.

土地を使っのぶどう園経営です。それも借金苦の農民から奪った土地を使って、利益優先の貿易産業として輸出ワイン用にぶどう園を作るわけです。このことは、農民の不快感を呼ぶ以上のことでした。そのうえ農民たちの土地だった所で、その農民たちを小作人として働かせるのですから、ぶどう園の主人に対する小作人たちの憎悪^{そうお}・敵意はかなり強いものでした。

譬え話の始まりで、ぶどう園の主人は「旅に出た」(12:1)とあります。大土地所有者たちは時々旅に出る必要がありました。まず、不在地主として所有している領地・不動産を巡回する必要がありました。そして輸出入ビジネス等で新しい投資を行ない、ビジネス・ネットワークを拡大して、財産を蓄積・増大させていく必要があったのです。¹⁵

ガリラヤ農民たちは、イエスの譬え話の始まりの短い一文(12:1)を聞いただけで、この主人が「紫のしなやかな衣を着て日々ぜいたくに^{こころも}馳走^{ちそう}を食べて暮らす」(ルカ16:19)金持だと思い浮べたことでしょう。そして、その下では多くの男女が、奴隷・小作人・日雇い労働者などとして、日々の生存そのもののために苦しんでいるという、¹⁶ 馴染みの背景状況をすぐ思い浮べたことでしょう。

3. 収穫期

次に話は収穫期の出来事に進みます。ぶどう園の主人は、「(ふさわしい)時期」(kairos)が来たので、収穫物(karpos 複数形、実り)を受け取るために「家臣」である奴隷(doulos)を送ります。諸福音書で主人は、奴隷を1人ずつ3回(トマス・マルコ・ルカ)または1度に3人送り(マタイ)、その後多くの奴隷たちを送り(マルコ・マタイ)、最後に息子を送ったと書か

15 Herzog, *Parables as Subversive Speech*, 85, 158.

16 ガリラヤ農民たちは、ぶどう園の主人を、ローマの貴族層と同じ手段でユダヤ人同朋を搾取するユダヤ人富裕層として思い浮べただけでなく、ローマ帝国そのものとしてイメージしたかも知れません。つまり、重税で先祖伝来のユダヤ農民の土地を奪っていくローマ帝国です。その場合、主人の奴隷家臣たちにはヘロデ王の貴族たちと祭司貴族たちを重ねあわせたことでしょう。Thomas Bohache, "Mark."

れています。当時のお話の世界では「3の法則」が用いられる慣習があったので、トマス福音書にあるように、「奴隷・奴隷・息子」が1人ずつ3回送られたというパターンがオリジナル版に近いと思われます。¹⁷

譬え話では、いつの収穫期か特定されていませんが、もしこれがぶどう園を作ってから4年目であれば、特に重要な時になります。初めてのぶどうの収穫を賃借料^{ちんしやく}として納めるのを拒否することは、ぶどう園の主人の所有権自体を認めないということになるからです。

小作人たちにしてみれば、飢饉か不作の年にやむなく借金し、その借金や法外に高い利子を払えないゆえに、先祖伝来の土地を奪われて小作人にされてしまったということは、納得のいかないことでした。ですから小作人すなわち農民たちには、主人の所有権を認めることなど出来ないという思いが強くあったことでしょう。

一方、主人にとってみれば、当然の賃借料である収穫物を渡さない小作人たちをしっかりと服従させる必要があります。そこで、奴隷を2度送った後に、3度目は息子を送ります。息子なら小作人たちが敬意を表わすと考えたからです。息子は主人の完全な代理人であり、小作人たちの反逆に対して正式な法的手段を取ることも出来るからです。

ところが小作人たちは、相続人である息子を殺せば「相続財産は我々のものになる」(12:7)と話合います。主人の息子すなわち相続人を殺して、自分たちの土地を奪い返そうとする企ては、現実的にありえることでした。

一定期間相続権が主張されない土地は「所有者無し」と見なされて、所有を最初に主張した者が承認される可能性があります。また、当時のラビ法(ラビ達による律法解釈に基づく諸法)では、たとえ正規の証書を持っていなくても、3年間訴訟^{そしやう}者がいなければ所有権が認められることになっていました。ですから譬え話の中で小作人たちは、元々自分たちから奪われた先祖伝来の土地を奪い返すことを企てたのだと、考えられるので

¹⁸
す。

4. 小作人たちの暴力

ところで、譬え話で小作人たちの暴力はなぜ詳しく語られているのでしょうか？ それは恐らく、疑似体験^{ぎしたいけん}を引き起こすためと思われます。すなわち、農民たちが生存そのものを脅威^{きょうゐ}に晒されて暴動を起こさざるを得なくなる時の心情や、日々の抑圧が破裂点に達した時に暴力がエスカレートしていく様子を、聴衆が実感するように描き出しているのです。

主人から送られる奴隷は、主人の家で働く家臣で、主人の決定を代理として実行する者です。奴隷である家臣たちは、あくまでも主人に従って行動する存在です。けれども農民たちにとっては、「主人」は基本的に接することのない、見えない存在です。一方「家臣」は、度々具体的に接する非情な「搾取者」そのものです。必然的に、蓄積された憎悪や敵意は、目の前の家臣たちに向けられます。

小作人たちは、始めに送られてきた奴隷家臣を「殴り」(12:3)ですが、家に帰させます。次は「頭を傷つけた、そして辱めた」(12:4)とあります。「辱めた」は、古代男性間で相手を征服したことを象徴する行為であった、レイプを暗示します。これは、相手の男に対して非常に強い屈辱感^{くつじよく}を与える暴力行為です。最後に小作人たちは、主人の息子を殺してぶどう園の外に「放り出した」(12:8)とあります。これは、遺体^{いたい}を野獣や鳥がむさぼり食うに任せたということです。遺体を埋葬^{まいそう}せずに放置することは、その人を最悪の落ちぶれた状態にさせるという意味を持ちます。¹⁹

このような小作人たちの暴力のエスカレートの描写は、とてつもなく強大な暴力システムの中で、貶められ、いじめぬかれて来た農民たちに「仕返し」^{ぎし}の疑似体験を提供したことでしょう。

こういう形で話を聞くこと自体が、農民たちにとっては一時のストレ

17 マルコ、マタイ、ルカは、それぞれの編集意図に合わせて、奴隷の送り方や人数を変更したと考えられます。Bernard Brandon Scott, *Hear Then the Parable*, 245-253. Herzog, *Parables as Subversive Speech*, 98.

18 Herzog, *Parables as Subversive Speech*, 110-112. Reid, *Parables for Preachers: Year B*, 117. J. D. M. Derrett, *Law in the New Testament*, 289-306.

19 山口里子『虹は私たちの間に』43-44. Schottroff, *The Parables of Jesus*, 16.

ス解消効果や満足感を持つことになったかも知れません。聴衆の中から、鬱積した激しい怒りを吐きだすような、「そうだ！ やっちまえ！」という言葉やあざ笑いが出て来たとしても、不思議ではなかったことでしょう。²⁰

5. 土地と相続

元来、イスラエルにおいて、土地は神のものと理解されてきました。あるいは言い換えれば、神から条件付きで人々に与えられて先祖代々継承されてきた遺産として理解されてきました。ヘブル語聖書には、土地を私的所有物として売買することを禁じる戒めと、土地の恵みの独占を禁じる戒めがあります。

ですから土地は、農民にとって生存手段として欠かせない大切な財産であるだけでなく、神から与えられ先祖から継承された基本的な権利でもありました。それと共に、本来神のものである土地からの恵みには誰もが平等に与える権利があるという理解も、根底にありました。

穀物を刈り尽くしてしまわず貧しい人々が「落穂拾い」を出来るようにするという規定は、ヘブルの人々が寄留の民だった時に他の人々から受けたホスピタリティ（もてなし・厚遇）の経験を、今度は他者に示すという大切な伝統に由来しました。そして更に、土地は神のもので人間は土地を神から与えられている（預けられている）という、土地所有に関する根本的な理解から出てきたものでした。

そのような土地を、エリートの大土地所有者たちが無制限な利益優先で奪うことは、許しがたいことでした。ヘブル語聖書は、そのような行為を激しく断罪しています（例：出 3:7-8, 17, レビ 19:9-10, 23:22, 25:2-4, 23-28, イザヤ 5:8, ミカ 2:1-2）。²¹

20 Herzog, *Parables as Subversive Speech*, 112. Douglass, *The Nonviolent Coming of God*, 217 注 43.

21 Herzog, *Parables as Subversive Speech*, 94. V. George Shillington, "Saving Life and Keeping Sabbath."

ヤハウェは言われた。「私は、エジプトにいる私の民の苦しみをつぶすに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼等の叫び声を聞き、その痛みを知りました。それゆえ私は降って行き、エジプト人の手から彼等を救い出し、……乳と蜜の流れる土地……へ彼等を導き上ります。」（出 3:7-8）

土地は、買い戻す権利の放棄へと、売られてはなりません。土地は私（神）のものであり、あなたたちは私の土地に寄留し、滞在する者に過ぎません（レビ 25:23）。²²

災いだ。家に家を連ね、畑に畑を加える者たちは。あなたがたは余地を残さぬまでにこの地を独り占めにしている。（イザヤ 5:8）

災いだ。寝床の上で悪を企み、悪事を謀る者たちは。……彼等は貪欲に畑を奪い、家々を取り上げる。住人から家を、人々から嗣業を強奪する。（ミカ 2:1-2）

譬え話の主人は、このようなイスラエルの伝統的な土地理解も、先祖伝来の土地を守るための「ゴーエール法」（レビ 25:25）の伝統精神も、律法に基づく利子・借金の免除なども、完全に無視・放棄した人間です。まさに、神に対する畏れも人に対する優しさも知らない、傲慢・強欲な人間であり、それゆえに直接の小作人たちを始め近隣の農民たちの激しい憎悪・敵意の対象になっている人間またはその背後にいる「真犯人」です。²³

しかし、たとえ相手がそのような神をも知らず強欲・傲慢・非情な人間であっても、否むしろそのような人間であればなおのこと、小作人たちの暴力的な仕返しの結果はどうなるのでしょうか？

22 高柳富夫「土地はわたしのもの」私訳参照。

23 Herzog, *Parables as Subversive Speech*, 112-113. Schottroff, *The Parables of Jesus*, 17.

6. 最後の問い

譬え話の最後の問い、「さて、このぶどう園の主人はどうするだろうか？」(12:9)は、聴衆を冷酷な現実^{れいこく}に引き戻します。冷静に考えれば、問いへの答えは明白です。貧乏人たちの小さなグループの単発的な暴力行為・暴動は、たとえ一定期間小さな成功があっても、必ず公的な制裁で踏みつぶされます。そして結果的に、以前にも増して、合法的で冷酷・卑劣^{ひれつ}な抑圧がもたらされることになります。²⁴

「剣^{つるぎ}を取る者は剣で倒れる」(マタイ 26:52)。このことを、ガリラヤ農民たちは大小の暴動で経験してきました。特に紀元前4年のセツフォリスの事件で非常に痛い経験をしたばかりです。²⁵

この譬え話は、土地の所有権や遺産や相続のテーマを改めて思い巡らす機会を提供し、社会で合法・当然とされている事柄に対して、根本的なところから疑問を呈示します。それと同時に、暴力のエスカレートや暴動が決して農民の生活を良くすることはなく、更なる悪化、暴力のスパイラルに終わるといふ、冷酷なジレンマの現実を想起させます。

そしてもう一度、聴衆の心に問いかけを残します。神から土地を与えられた「相続人」としての自分たち農民の自尊心と生活を守るために、暴力による仕返しではない、他の道はないのだろうか？と。²⁶

24 Herzog, *Parables as Subversive Speech*, 113.

25 イエスが語ったとして伝えられるこの言葉は、イザヤ 50:11 のアラム語版カタルグム (targum) に基づくもので、人々に知られていたと思われます。恐らくイエスが生まれたのと同じ年に起きたセツフォリスの抵抗運動と、それに対するローマ帝国によるセツフォリス全焼と多数の住民の磔刑と奴隷化の出来事からも、暴力が決して平和をもたらさないことを、イエスは実感していたことでしょう。参照：Douglass, *The Nonviolent Coming of God*, 104, 217 注 42。セツフォリスの出来事について：山口雅弘『イエス誕生の夜明け』90-91, 135-138。

26 Herzog, *Parables as Subversive Speech*, 113. Reid, *Parables for Preachers: Year B*, 119. 田川建三は、この譬え話の状況は農民一揆だと述べて、ぶどう園の主人は搾取的な大土地所有者の姿であると指摘します。私も同感です。それにも拘らず田川は『イエスという男』の1980年版だけでなく2004年の改訂版でも、イエスが「主人＝神」として語っていると理解します。このため彼は、イエスがこの譬え話で

V. 思いめぐらし

1. イエスも仰天の解釈？

この譬え話の学びを通して気づかされることは、1世紀にガリラヤでイエスの譬え話を聞いた農民たちにとって、ぶどう園の所有者である主人は、神をも知らぬ傲慢・非情な人間そのものだったということです。「主人＝神」などという解釈は、全く思いもよらないことだったであろうということです。ですから、譬え話を語ったイエス自身、びっくり仰天^{ぎょうてん}、耳を疑ってしまうほどの誤解を、私たちはしてきたのではないか、ということです。

私たちは、イエスが生きた時代状況とは全く異なる世界で生活しています。ですから、時代錯誤^{さくご}の解釈を再生産し続けていかにしないようにするためには、かなりの注意が必要です。特に、当時の政治・経済・社会状況などの背景について学ぶこと、そして貧しい人々、農民・漁民^{ぎょみん}などの庶民に注意を向けて学ぶことが、イエスが語った譬え話のメッセージを理解するうえで欠かせません。

一方で、私たちは、イエスが生きた時代状況における不公正な社会・経済システムが全く過去のものではないということにも、気づかされます。つまり、イエス時代の不公正な社会・経済システムやそこで苦闘^{くとう}する人々の姿に根本的なところで共通する事柄が、実は現代世界にも深刻な状況として有るということにも気づかされます。そういう学びと気づきの中で、私たちは改めてイエスの譬え話を聞き直し、思い巡らしを深めたいと思い

大土地所有の社会を当たり前のこととして認めてしまっていると、批判しています(245-250)。田川自身が「主人＝神」の前提を外す可能性を考えないでイエスの譬え話を解釈していること、そしてこの誤解に基づいてイエスを批判していることは、残念です。

なお、「イエスは譬え話を語って聴衆の心に問いかけを残した」と言うことは、「イエス自身は既に全ての正解を知っていて、教育のために問いを与えた」という意味になるわけではありません。イエスがそのような姿勢で語ったと理解する人々もいますが、私はそのようには思いません。むしろ、時に方向性を提示しつつ、一緒に苦しみ一緒に考えようという姿勢で語ったと理解しています。

ます。

2. 見えにくい人々への想像力

イエスのこの譬え話をガリラヤで聞いた聴衆は、どういうメッセージを聴き取ったのでしょうか？ どういう「他の道」の可能性を思い巡らしたのでしょうか？

怒り・憎しみが今にも爆発しそうで、いつ暴力行為に走っても不思議ではない状況にいた農民たちにとって、この譬え話は、どのような経験になったのでしょうか？

なかでも、女性たちはどう感じたのでしょうか？ 女性たちの多くは、日中は男性たちと共に小作人として労働し、更に家庭の第1責任を担い^{にな}ました。彼女たちは、日々の食糧に事欠く状態で、家族の食事や、生身の体にとって必要な事柄全てに対して心を配っていました。知恵を絞り工夫を凝らして日々の具体的な働きを担って生活していた貧しい女性たちにとって、この譬え話はどのような経験になったのでしょうか？²⁷

更に、そのような貧窮した危機状況の中で、働くこと自体が困難だった、病氣や障^{しょうがい}碍を負っている人々にとって、この譬え話はどのような経験になったのでしょうか？

当然ながら、貧窮した農民の家族状況にも、その人々が負わされていた重荷にも、様々な違いがあったでしょう。男性や女性の間にも、老人や若者の間にも、色々な違いがあったでしょう。固定観念的な一律の想像は危険です。私たちは、こういう点にも注意を向けて、様々な具体的な想像力を広げることを学びたいものです。

それらを踏まえて、私たちは更に、現代世界における不公正のシステム、犠牲のシステム、暴力のスパイラルを呼ぶ状況に、思い巡らしを広げたいと思います。譬え話の小作人たちや近隣の農民たちは、現代世界における

どのような人々を象徴しているのでしょうか？ そしてこの譬え話は、いま私たちに、どのような問いかけをしているのでしょうか？



ガリラヤ湖（鈴木英司撮影）

27 参照：Louise Schottroff, "The Parables of Jesus."

そうして一行はエルサレムの町に入りました。もう、昨日までとは全く違うエルサレムです。その中心部である神殿は数千人の人々によって占拠され、これまでの商売は禁止されました。今、ここは本当に、「すべての民の祈りの家」となったのです。神殿には神殿警察がいましたが、誰も、もう、何もできませんでした。ただ、イエス様とその仲間が、この神殿を開放し、管理するようになっていました。その様子を確認するように、イエス様は神殿の中を歩きました。そんなイエス様の所に、「長老・祭司長・学者」と呼ばれた人々（つまり、イエス様の時代のイエス様の国で権力を分け合っていた人々のすべて）がやってきました。この人たちは、イエス様に言いました。「こんなこととして、いいと思っているのか！そもそも、誰の許可を取って、こんなことをしているのか？」イエス様は、こうお答えになりました。「では、私も一つ、質問しましょう。もしお答えいただけるなら、こんなことをしていいのかどうか、私も答えます。」そして、イエス様は一つの質問をしました。「私の師匠・ヨハネのことです。彼がしていた『沈めの儀式』も、ずいぶん大きな運動になりました。あれは、天が（つまり神さまが）下さったものだったのでしょうか。それとも、だれか偉い人が考え出したものだったのでしょうか——お答えいただけますか？」

「長老・祭司長・学者」と呼ばれた人々（つまり、イエス様の時代のイエス様の国で権力を分け合っていた人々のすべて）

は、互いに話し合い始めました。そして困ってしまったのでした。「いったい、何と答えたらよいのだろう。もし、『あれは天が（つまり神さまが）下さったものだった』と言えば、あいつは『それなら、どうして信じなかったのか』と追及してくるぞ。でも、『あれは、単に人が思いついたものにすぎない』と、そんな本当のことを言ってしまったら、どうなるだろう……。』この世界には、一つの道理があります。「死ねば終わり」とか「生き残らなければ無駄」という道理です。その道理に従って、最善の答えを出す。それが「長老・祭司長・学者」と呼ばれた人々（つまり、イエス様の時代のイエス様の国で権力を分け合っていた人々のすべて）のしてきたことでした。そのことに、この人々は全力を注いだのです。その為だったら、誰かを犠牲にしても「しょうがない」。それが道理というものです。でも、「沈めの儀式」を行ったヨハネは、それをひっくり返しました。それで、「犠牲」にされた人々・世の中の矛盾と不条理のしわ寄せを一身に引き受けさせられた人々は、自分たちを追い詰める「道理」を蹴飛ばしてくれるヨハネの「沈めの儀式」に期待をかけた。「この人こそ、本物の預言者（神さまの言葉をもって現れた人）だ」と、熱狂した。「でも、本当は、あれだって、ヨハネの『生き残り戦略』に過ぎなかった、みんな、騙されているのだ！・・・」と、そう思っている心の中を語ることは、とても勇気のいることです。そんなことをしたら、今、同じ期

待をもってイエス様を見ている数千の人々（もっと多くいたかもしれません）を、一斉に敵に回すことになる。そうなったら、自分たちは負けてしまう。殺されてしまう。そうなったら、おしまいだ——それが、「長老・祭司長・学者」と呼ばれた人々（つまり、イエス様の時代のイエス様の国で権力を分け合っていた人々のすべて）の「道理」です。だから、結局、この人たちはイエス様にこう言いました。

「よくわかりませんな。」

それで、イエス様もこの人たちにこう言いました。

「では、私も、こんなことをしてよいのかどうか、お話ししないことにします。」

——そう言えば、イエス様はこんなことも言っていました。

「ある人が、葡萄畑を作った。」

この一言で、聞いていた多くの人の顔が陰しくなりました。イエス様の周りにいる人々は、病気の人が多かった。生活が苦しくなって、体調を崩した人がほとんどだった。病気になっても休むことができないで、体を壊していた。それは、この「葡萄

畑」のせいだ、という人が、イエス様の周りにたくさんいたのです。

「葡萄畑を作るために、その人は、植えた葡萄を囲うため、延々と柵を巡らせました。」

やっぱり！と、聞いている人々の目が、少し大きくなりました。身に覚えがあるのです。

・・・先祖伝来の土地があった。それを大切な畑にして、おじいさんも・お父さんも生活をして、俺を育てた。

いつ頃からか、でも、「ローマ帝国」とか「ヘロデ王」とか「神殿」とかいう偉い人たちが、税金を寄こせと言い出した。毎年、畑でできるものの半分以上をもっていくという。それは「私たちが平和に暮らすため」なのだという。拒否する人も、村にはいたけれど、みんな、殴られたり、殺されたりした。だからしょうがない、その通りにしていた。でも、ある年に雨が降らず、畑に実がなかった。みんな蓄えていたものを食べて次の年を待つことした。でも、その年も「ローマ帝国」も「ヘロデ王」も「神殿」も、当たり前のようにやってきた。「税金を寄こせ」という。「ない」と言うと、「その蓄えがあるじゃないか」と言ってきかない。「これは渡せない、家族が死んでし

まう」と頑張ると、その税金取りはにっこり笑って、「じゃあ、この土地をよこせ」と言う。「だいじょうぶだ、この土地を、もっと儲かる場所にしてやる。そこでお前は働けばいい。きちんと、給料はやろう。そうしたら、もう自分で考えなくていい。言われた通り働けば、今よりずっと、豊かになるぞ」と、気持ちの悪い優しい声で、税金取りはそう言った。

「そうか」と思った。それが間違いだった。俺がばかだった。当座の食料を確保するために、先祖伝来の土地を渡してしまった。土地は「葡萄畑」に変わった。汗水たらして働いても、食べ物一つできない場所に、そこは変わった。その葡萄はワインに変わる。そして、ワインの値段が変わるたびに、俺たちの給料も変わる。だいたい、給料が増えるなんてことは、ほとんどなかった。ひどい時は「仕事はない」の一言で、手ぶらで帰ることになる。でも、その土地は本当は、俺たちのものだった。おじいさんのもの、お父さんのものだった。何でこんなことになるかと、腹が立って、腹が立って。

ある時、近くの村で、事件が起こった。「葡萄畑」に放火があったという。全部燃やして、土地を取り返そうと、事件を起したやつがいた。やったのは、俺もよく知っている男だった。その男は、つかまって殺された。

そして、「葡萄畑」になったあの場所、「俺の土地のはずの場所」には今、「どこかのだれか」によって、ぐるっと柵が建てられた。「俺の土地だったはずの場所」に、俺は、もう、立ち入ることもできなくなった。・・・

「それから、葡萄を絞ってワインにするための大きな装置を据え付け、見張りの塔を建て、農民を雇い、そして、その人はいなくなりました。」

もう、聞いている人の心は、遠く自分の故郷の悲しい光景でいっぱいになっています。・・・俺が育ったあの美しい畑は、見るも無残な別物になった。俺に優しくったあの土地は、俺を見張ってこき使う恐ろしい場所になった。そんなひどいことをした「どこかのだれか」は、また次の場所へ行って、同じことをして回るのだ。・・・

「それから、4年の時が経ちました。その葡萄畑の主人は、雇った農民のところへ、部下を送ってきます。最初の収穫の年ですから、本当は自分で行きたかったのですが、手が回らなかったのです。とにかく、最初の収穫をきちんと絞って、ワインに変えるために、所定の場所へ、運ばなければならなかったのです。」

・・・ともかく、四年間、働いた。上がったたり下がったりする給料に苦勞させられながら、必死で働いた。葡萄ができた。でも、またあの「税金取り」と同じ顔をした連中がやってきた。今度も優しい顔をしている。あいつら、また、やってきた・・・。

「でも、その部下たちは、手ぶらで帰ることになりました。農夫はその部下たちを殴り、追い返したのです。」

・・・そうだ！

そうだ！

やってしまえ！・・・

「葡萄畑の主人は、やっぱり手が回らないので、しょうがない、また別の部下を、もう一度送ってきました。でも、その部下もまた、手ぶらで帰ることになります。今度は頭を殴られ、顔に大きな傷をつけられ、そして、とても口では言えないような徹底的な屈辱を味あわされて（わかる人は、どうぞ、想像してください）。」

・・・ん、まずいな。怒りが加速して、抑えが利かなくなっているぞ。

これは、まずいことになる。

でも、なんだか、いい気分だ。

そうだ。そうして当然だ！・・・

「それで、葡萄畑の主人は、今度は複数の部下をまとめて送ってきました。そうすると、待ち構えていた農夫たちは、その部下たちに襲い掛かり、まず一人を殺し、それから他の部下たちも殴って、そして何人も殺してしまいました。」

・・・おお！そうか。みんな団結したか。

畑を取り返すんだ。故郷を取り返すんだ！・・・

「この葡萄畑の主人は、ずいぶん人の好い性格でした。きっと何か思い違いがあるに違いないと、農夫たちのことを考えて、そして息子に言いました。『困ったことになった。私の思いが伝わらないようだ。お前、行ってくれるか？』この主人には一人しか息子がいませんでした。ですから、この主人は息子をとても大切に思っていました。そのことは評判になっていたのです。だから、このひとり息子を送れば、自分の思いも伝わるだろうと、この主人は考えたのでした。」

・・・ん？ と、いうことは・・・

「しかし、農夫たちはそう考えませんでした。息子がやってきたので、農夫たちはとりあえずお迎えし、そして話し合ったのです。『あれを殺そう。そうしたら、うまくいくと、この土地は俺たちのものになる』。』」

・・・そうだ。俺たちの相続に関する法律では、

「土地は息子が相続する。

所有者が死んで息子がいない場合、

その土地の所有権を最初に宣言したものが、

その土地を所有する」と決まっている。

これは、千載一遇のチャンスだ。まだ葡萄の収穫もできていない土地だ。

「どこかのだれか」も、きっと、あきらめるに違いない。

やれ！

先祖伝来の土地を、取り返すんだ！・・・

「農夫たちは、この息子を殺しました。そして、その死骸を葡萄畑の外に投げ捨てました。鳥や犬がやってきて、その遺体を食い荒らすに任せたのです。」

ここでイエス様は、一息を入れて、周りを見渡しました。物語の中に引き込まれた人々が、いろいろな顔をしています。興奮している顔、無表情の顔、そして、青ざめている顔です。

「さて、その後、どうなったと思いますか」

と、イエス様は話を続けました。

「葡萄畑の主人は、この農夫たちに、何をするでしょうか。この農夫たちのところへ軍隊と一緒にやってきて、そしてこの農夫たちを殺すでしょう。そして、別の農夫を雇って、この葡萄畑を任せることにするでしょう。」

——世の中の矛盾の犠牲になった人々と向き合い、毎日病人をいやし、食事を与え、病気にならないように生活を立て直すこと、そのために心持を整えることを教え続けたイエス様です。この世の中の矛盾は、痛いほどよくわかっていました。

そして、その矛盾に本能的に気づいて「何とかしてほしい」と、世直しを願う人々の思いも、よくわかっていました。

でも、イエス様はその人々の思いにくぎを刺していたのです。結局、そうした「正義」を求める思いは、悲劇を生み、悲劇に終わる。正義を求めたはずの人々によって、何の罪もない「ひとり息子」が惨殺されて、そしてすべてが破壊されて終わる。

世の中の矛盾は、どこまでも巨大に私たちを飲み込んでいる。

では、どうしたらよいのか。

神殿は、今、転覆しました。「宮清め」が行われた。世の中に矛盾を拡散する大きな震源地が、一つ、変えられた。それはまるで、主人の「ひとり息子」を迎えた葡萄畑のようなものです。葡萄畑の主人は、農夫たちと「ひとり息子」が話し合ってくれることを期待している。

さて、どうなるか。

イエス様は知っていました。「ひとり息子」は、殺される——でも、イエス様はその先を見ていました。そして、こんなことを言ったのでした。

「旧約聖書の『詩編』のギリシア語訳には、こう書いてありましたね。読んだことがあるでしょう。」

投げ捨てられた 石がある。

大工が捨てておいた石。

うち捨てられた その石が

礎石となって 支柱を支える。

頭石（かしらいし）となり アーチを支える。

これは不思議な出来事だ

私たちにはわからないこと

成し遂げたのは

「主」と名乗られる 聖書の神様。

実際、「長老・祭司長・学者」と呼ばれた人々（つまり、イエス様の時代のイエス様の国で権力を分け合っていた人々のすべて）は、イエス様を逮捕しようと真剣に検討をしていました。でも、数千人の人々がイエス様を守っています。恐ろしくて、どうにもできませんでした。それは一つには、このたとえ話が「自分たちを当てこすっている」と気づいたから、でもあったのです。

それで、イエス様のことはそのままにして、とりあえずその場から、その人たちは離れたのでした。